



6月は初期管理が重要です！

初期の管理は作物の“基礎づくり”にあたる重要な時期です。
この時期にしっかり管理することで、活着の安定・雑草の抑制・病虫害予防
など、年間の収量や品質を大きく左右します。

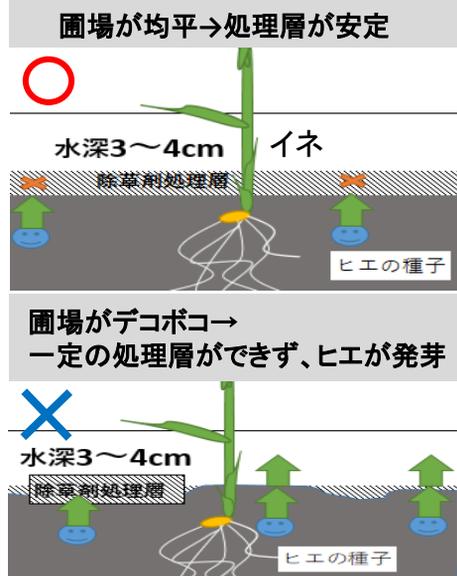
HPにカラー版を
掲載しています
(毎月1日更新)

● 水稻の管理

◆ 雑草防除：除草剤は“処理層”で効く！水深・均平・水持ちが大事！

初期除草剤の効果を最大限に発揮するために必要な4つのこと

- 漏水していないか確認！
→畔やヒビのチェック。水持ちが悪いと効果が半減します。
- 圃場を均平に整えよう！（右図）
→除草剤の処理層を安定させ、薬剤の効きムラを防止
しましょう。
- 湛水散布は「水深3～5cm」で均一に保つ！
（ジャンボ剤使用時は水深5～6cmが目安）
→水深が不安定だと、薬剤が偏ったり浮いたりして、
効きムラの原因になります。
- 7日間は落水・かけ流し厳禁！
→水を動かすと、除草剤の効果が薄れます。



除草剤の使用時期の目安

★水田内で最も生育の進んだノビエの葉齢が目安。

| 種類 | 使用適期 |
|---------|-------------------------------------|
| 初・中期一発剤 | 移植直後または活着後～移植後20日後位（ノビエ2.5葉期頃まで） |
| 中・後期剤 | 移植後20～25日位（ノビエ2.5～3.5葉期頃まで）※体系処理で使う |

※使用前はラベルをよく読み、使用時期、使用方法を守って散布しましょう。



以下の稲品種には、特定の除草剤が使えません！

「みなちから」「タカナリ」「モミロマン」「やまだわら」「オオナリ」「ミズホチカラ」「笑みたわわ」等特定の除草成分（ベンゾピシクロン、メソトリオン、テフリルトリオン）で薬害が起き、白化して枯死する場合があります。上記の品種の栽培において、これらの成分を含む除草剤は使用しないでください。

←農研機構のHPで詳細をご確認ください



◆ 土づくり：麦わらはすき込むことで地力アップ

トラブルを防ぐ4つのポイント

- ① 麦わらを15cm以上の長めにカット
→代かき時の浮き上がり防止。
- ② 荒おこしは、早めの時期に深く耕す
→よく混ぜて分解が進みます。
- ③ 代かきは、極浅水で行う
→麦わらが浮きにくくなります。
- ④ 水はためたままにしない
→稲の根を健全に保つため。
有機物が分解される時発生するガス等により生育障害が発生する場合があります。
移植後15日と25日を目安に水を入れ替えましょう。

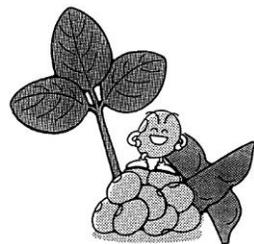
水稻品種「なつほのか」の適切な栽植密度

- ・ 植付け株数は 坪あたり50～60株(株間22～18cm) 程度を目安としましょう。
→安定的な収量、品質を確保するため。

●大豆の管理

今年から導入されるちくしB5号の播種は、6月下旬から7月上旬が最も適した時期です。6月は播種に向けた畝立て・除草・排水対策を万全に整えましょう。

播種の“適期”こそ、大豆の収量と品質を大きく左右します。



◆雑草管理

雑草が多い場合、播種前に非選択性茎葉処理剤を散布しましょう。

※水稲への影響が大きいので、周囲の水稲に飛散しないよう注意しましょう

◆排水対策：畦立・額縁明渠・弾丸暗渠

・大豆は湿気に弱い作物。特に出芽～初期生育期の過湿は要注意。

・梅雨時の雨で発芽不良や生育不良が起きやすく、昨年も播き直しの事例が多数ありました。

★排水対策は播種前に必ず実施

①畝を立てる（縦畝） ② 額縁明渠(ほ場の周囲に溝)を耕起前に掘る

③必要に応じて弾丸暗渠も検討 ※梅雨明け後は干ばつにも注意。

◆土づくり：根粒菌が働く環境づくりがカギ

●土壌改良

根粒菌の活性を高めるため、最適なpHは6.0～6.5程度です。

(※根粒由来の窒素固定量は約4～8割を占める。) 土壌診断により圃場のpHを確認し、石灰質資材でpHを調整しましょう。

【粘質～壤質土壌の各資材施用量(目安 kg/10a)(目標:pH 6.2)】

| 改良資材 | 土壌のpH | | |
|------|-------|-------|------|
| | <4.5 | <5.0 | <5.5 |
| 苦土石灰 | 240kg | 140kg | 70kg |

* 土壌診断により改善に向けて石灰質資材が300kg/10a以上などと多量施用を診断された場合は、数年に分けて施用(年150kg/10a程度)し、徐々に改善してください。

大豆は地力を消耗する作物のため、根粒菌に好適な土壌環境を作るとともに、堆肥等の有機物を入れて土づくりを徹底することが重要です。

●元肥 やせた圃場や収量低下が予想させる連作田では必ず施肥を行いましょう。

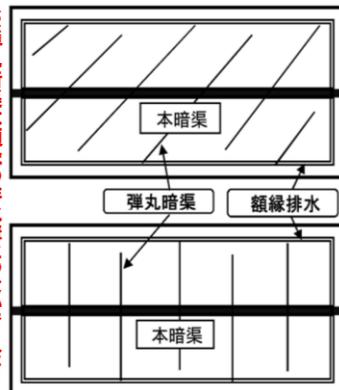
○根粒菌着生するまでの初期成育の確保

→窒素等の基肥を施用する。

※大豆は子実タンパク質が多く、窒素が不可欠。根粒菌が窒素を供給するのは中期以降なので、初期は肥料で補う。

| 圃場の種類 | 成分量(kg/10a) | | |
|-----------|-------------|-----|----|
| | 窒素 | リン酸 | カリ |
| 転換初年度・肥沃田 | 0 | 10 | 10 |
| 連作田・やせ地 | 3 | 10 | 10 |

※弾丸暗渠は額縁の排水溝につないでください。



「排水対策の施工例」

◆出芽の確保：出芽確保が収量を左右（大豆は分けつしない）

●耕起・砕土について

・土塊が多いと出芽不良や除草剤の効果低下の原因となります。

・逆に土が細かすぎると雨の後に土表面が固まり、出芽率の低下を招く恐れがあります。

ポイント ・15cmくらいの深さでしっかり耕す（プラウやロータリーを使用）

・土は7割くらいが直径2cm以下になるように砕く（砕土率約70%が目安）

・播種深度を均一に保つために、ほ場を平らに整地する

※耕起後の降雨は、土が水分を含み乾きにくくなり、播種適期を逃す可能性があります。

そのため、播種直前の耕起を徹底し、速やかに播種作業に移れるようにしましょう。

◆種子消毒：健全な苗立ちと初期生育の確保

・病害・虫害の予防効果がある薬剤で処理してください。

・種子腐敗やネキリムシの被害を防止し、欠株を減らせます。

農作業に伴う道路の泥汚れ防止をお願いします

農地から道路に出る際は、泥や土を落としてから走行していただくようお願いします。

【農業情報メール配信の登録募集！米・麦・大豆の栽培管理情報をいち早くキャッチしよう！】

件名または本文に【宇佐市 氏名】を記入して、配信受付メールアドレスにメールを送信してください。差出人のメールアドレスに農業情報を配信します。

◆配信受付メールアドレス syuraku-hokubu@pref.oita.jp